

目が覚めて

E氏（40代男性、A.A.メンバー）

昨日の酒が残っていて、具合が悪かった。朝、電話をとって会社に掛けると事務の人が出た。「今、上司が変われと言っているので変わります。」と言われた。上司は「辞表を持って、すぐに来い！」と言った。僕はまだ酔っていて、気が大きくなっていた。「今から書いて、持って行ってやる。ちょっと待っている！」と、言い返した。今まで辞表を書いた事が無かったので、漢和辞典の書き方の欄を探し、便箋を用意した。いざ書こうとすると手が震えまともに字にならなかった。また、酒を飲んだ。手の震えは治まったが、ああ言ってやろう、こう言ってやろうと、考え始めると、どんどん酒を飲んでいった。寝てしまい、気が付くと夜更けになっていた。目の前には書きかけの辞表があったが、また、酒を飲んだ。自分の周りは空き缶や空き瓶、汚れた衣類等のゴミの山しか無かった。

何時か分からないが電話が鳴っていた。出ると叔母だった。「入院させるから、地下鉄駅に来い」と言っている。叔母は小金持ちのいい金づるだったので、とりあえず行く事にした。前から入院させると言っていたので、たぶん内科で入院の手続きに行くと思っていた。駅に着いて叔母を探してみたがどこにもいなかった。また、家に帰って酒を飲み直した。また、電話が鳴った。出ると待合場所を間違っただけ。駅には行ったが泥酔状態だったため、よく覚えていない。タクシーに乗った後、気が付くと窓に鉄格子のはまった部屋だった。後で知るが精神病院の保護室だった。そこで医師に「アルコール依存症」と診断された。良くわからなかった。19歳の時から毎晩飲み始め31歳になるまで酒で死ねたら本望と思っていた。薄々は酒に問題が在る事は知っていたが、止めようと思っても、すぐに飲んでいて。病院では思い通りに行かない事が多くあったため、早く退院する事だけ考えた。その病院でAAに出会った。

叔母や両親の手前、頑張っている振りをしなくてはいけないと思った。どうせ酒を飲む事になるから、言い訳が必要だった。主治医も君みたいな若いのは何年か棒に振ってもミーティングに行ってみて来いと言った。それが現在まで続いている。あるミーティング会場で仲間に何もかも失くす病気だぞと言われた。ある場では今日一日だけ止めようと言われた。ミーティング会場ではひどい話を正直にしている仲間が沢山いた。人の事をひどいと思っていたのが、勇気を出して自分の過去を話すと自分もひどいと思えた。自分中心にしか考えて来れなかったが、仲間は色々な事を気が付かせてくれた。1人では生きていけないと思えた。先月、その叔母が亡くなりました。仕事とミーティングの合間、病院に出来るだけ通う様にし、色々な話をしようと思いました。自助グループやプログラムが無かったら、ずっと酒に酔ったまま、目が覚めずにいました。叔母には命を貰ったので、次の人に手渡していきたいです。